

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 ドストエフスキー 『罪と罰』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

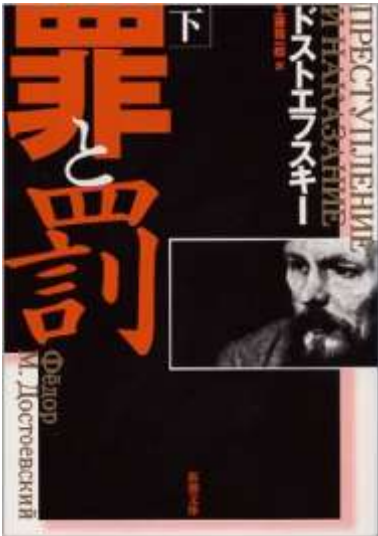
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 102 回のツイキャス読書会の課題図書は、ドストエフスキーの『罪と罰』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

解説はこちらでしています。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCvopJuVUcJdEUBJZCZvCmgV>

『罪と罰』の感想

この小説を初めて読んだのは十七歳の時で、私は全くファンタジーを読むように読んだ。未だに私は小説を読む時には、どんなにそれがリアリズムで描かれたものであっても、ファンタジーとして読む癖から抜けられない。

現実の生活は、ラスコーリニコフの生きた生活のようにロマンチックではない。殺人者の生活のどこがロマンチックなんだと思われるかも知れないが、私はこの小説の世界に夢のような憧れを抱くことを禁じ得ない。

世界の文学というのは、日本の文学と比べると、私の夢の部分にガツンとぶち当たるような面白さがある。単純に言って、話が面白いのだ。そのへんの日本の漫画なんかよりも、世界の文学の方が面白い。

もちろん何が書いてあるのか理解出来ない時もあるが、理解出来ないなりに面白い。

それらの多数の世界の文学の中でも、『罪と罰』にはピカーの面白さがある。物語が始まった途端に激しい熱病に冒されて、その熱病が物語の終わりまで途切れることなく継続する。この熱病のような感覚は、日常の世界をそのまま描いた他のリアリズム小説では味わえぬものだ。

これはもう、ロシアのペテルブルグなどという飛行機で行けば何時間かで着く世界の話ではない。私たちとは時間や空間の動きの異なった別の世界の話のような気がする。そして同時に極めて深い共感を抱くのだ。

大江健三郎氏が、『罪と罰』の世界を一種のカーニバルのようなものと表現されていたことを思い出す。そのお話を聞いた時、なるほどそうだと膝を打った。

私は未だにラスコーリニコフと彼を取り巻く人々の激しく踊り狂うカーニバルの世界から抜け出していないのかも知れない。

『罪と罰』に出会えただけでも、この世に生を受けた甲斐があったと思わせる、そのような作品だ。

(おわり)

『英雄と呼ばれなかった男』

「アリョーナ」、「リザヴェータ」、それに「ソーニャ」、これらの女性三人を一人の女性として見立てた。

(「糸杉の十字架」の移動コースをたどると、こんな考えが浮かんでくる。)

被害者二人が加害者を許すだけでなく、さらに「糸杉の十字架」がラスコーリニコフに渡ることで、加害者を救済する《パターン》に見えてくる。

殺された老婆「アリョーナ」は、いままで注目されていなかった印象を受けていた。

しかし、亀山郁夫氏による、老婆殺しはラスコーリニコフに下された「罰」・「神の試練」である、という考えに接しとても新鮮な感触を受けた。

殺人の実行が「罰」ならば、「罪」はもっと前にあると考えると、論文上の「逆選民思想」ともとれる思想で、犠牲になる人がいる段階にあるのか？

現実社会では、この段階では「罪」を問われないが、神の世界ではこの段階ではもう「罪」を負わせるのか？

疑問ばかり浮かんでくる。

ソーニャ:「なんでもすっかりしていただきますわ！」

のところでは、自分自身に妙な反発が生まれてくる。神の推奨職業が「娼婦」か？

ラスコーリニコフが《ばかな女だ！狂信者だ！》と思うのに近い思いだ。

ここで、自分の立ち位置がはっきりした。ラスコーリニコフのような「暴力革命」は嫌だし、ソーニャのように「神」にすが
るのも生ぬるくていやだ。この中間のはっきりしない位置に自分がある。

自分のいる位置から「罪と罰」を読み取ることは可能なのか？ と思う。

ソーニャ:「十字路に立ち、ひざまずいて、あなたがけがした大地に接吻しなさい。」では、少し異様な感じがした。

答えは亀山氏の「なぜ、教会へ行くこと勧めなかったか」でわかった。

ソーニャの宗教観は「正教会」の主流派と違うんだ。

ラスコーリニコフ:「きみの十字架をもらいにきたんだよ、ソーニャ、《糸杉の十字架、つまり民衆の十字架か》

という言葉と思いがそのことを表しているように思う。

(おわり)

天知る、地知る、我が知る

前回のツイキャス読書会に参加した際は江守徹さんの朗読 CD を聞いて感想文を書きましたが、今回は工藤精一郎さん訳の新潮文庫版を読みました。

阿漕な金貸しのアリョーナ婆さんが、自分が死んだら遺産を修道院に寄付する意志がある事や、アリョーナ婆さんの首には財布と聖像と十字架を紐で結びかけてあった事など、朗読版では端折られていた事を知れて感慨深かったです。

ラスコーリニコフが初めてルージンと対峙する場面までしかまだ読んでいませんが、暑く、汚く、匂いのこもった世界の登場人物を誰に演じてもらうか？ も考えて楽しかったです。

私の中でルージンにもっともはまり役だなと思いついたのは、タレント弁護士で大阪府知事と市長を務めたあの方です。

隣人愛を叫びながら皆で貧しくなるよりも、まず自分の為に儲け、富があり、幸せな個人が増える事で社会が強くなると言ったルージンと、私学に通う家庭への助成金削減案の撤回を求める高校生に「日本は自己責任が原則。それが嫌ならあなたが政治家になり流れを変えるか、日本を出ていくしかない」と言ったあの方が重なりました。

自己を愛し、自己を自分の主人とし、自己に責任を持つことが重要であると私は考えます。

ただ、日本が神の国だったとしても、いつから自己責任の国になったのかは私には分かりません。

マルメラードフは、人は落ちるところまで落ちれば塵芥が箒で掃かれるように社会から追いやられると言いました。彼は結果アルコール依存になりました。

アリョーナ婆さんも未亡人になり、もしかしたら生きていく為に質屋になり、人から恨まれていたのかも知れません。

全てを社会のせいにするのも良くないと思いますが、小さく貧しくされた人の上に成り立つ社会、一部の人が多くの恩恵を受ける社会、一度掃き出されたら元に戻れない分断された社会があるなら、それを見てぬふりをしたり守り続けるのはおかしい。

皆が心身ともに健康で、教育を受け、経済的な余裕があるとは限りませんし、何か失敗をしても大手の銀行や大企業、政治家さんのように周りが忘れてくれたり、大きな後ろ盾があったり、国が救済してくれ立ち直れるような人ばかりではありません。

偉そうな事を言って私も、知らず知らず誰かの搾取された労賃、時間、心身の健康、尊厳の上で生活が成り立っているのかも知れないと今回読んでみて改めて思いました。

ラスコーリニコフが見た夢の中で老いた雌馬が鞭打たれ、殴られる様子を笑って煽る「人でなし」にならないために、自分の行動を誰かが見ている、誰も見ていなくても自分は自分の行いを知っている。自分を省みながら自分を愛し、同じように誰かを愛していきたいです。

(おわり)

『罪と罰』感想文

ラスコーリニコフとスヴィドリカイロフは似た存在だと今回は読んでいて思いました。

でも、ラスコーリニコフは、気付いていなかったのか、へんなプライドが邪魔をしたのか、愛されているという事と生かされている事に気づいていなかった為に老婆を殺すことになったのかなと思いました。

とても気の毒ですが、老婆の妹のリザヴェータの死によってラスコーリニコフも罪を償ってその後、明るい未来を想像できるようになったんだなと思えました。

解説もして頂いたので分かったつもりになっていましたが、今回は実感できたので良かったです。

スヴィドリガイロフも悪人で自分の利益優先で他人の幸せを願ってあげられるような人ではないけど、ラスコーリニコフにとってのソーニャのような存在や、ラズミーヒンのような友達もいなくて、少し気の毒に思いましたが、不幸な結果になってしまったのは罪を償う機会がなかったからなのかな？とも思いました。

ホントは奥さんと信頼関係を築けていたら良かったと思うし、本当の意味で愛する事を知らなかったから愛されなかったのかもしれないなと思いました。

最後の方で、夢の中の少女を介抱してあげていて誰かの役に立ちたいという気持ちの表れなのかなと思いました、
どういう事なのかな？とよく分かりませんでした。

今回は前回よりは読めたような気もしますが最後まで読むことに精一杯で中身をちゃんと理解するには到らなかったなと思いました。

(おわり)

『 シベリアにて～愛と自由 』

(引用始め)

この一事、つまり自分の一步に堪えられずに、自首したという一点に、彼は自分の罪を認めていた。

彼は、どうしてあのかとき自殺をしなかったのか？という問題にも苦しめられた。あのかとき河の上に立ちながら、なぜ自首を選んだのか？ 生きたいという願望の力がそれほど強く、克服がそれほど困難なものなのか？ 死を恐れていたスヴィドリガイロフでさえ克服したではないか？

< 新潮文庫 (下)P.568 >

(引用終わり)

金貸しの老婆及びその妹の殺害の罪により、ラスコーリニコフはシベリアの流刑地へ、七年の服役生活に入る。この時点では、まだ自らの「罪」を認めてはいない。唯一、自覚しているのは、刑法上の犯罪ではなく、非凡人が堪えてきた「一步」を自らが堪えられず、自首をしたということだ。

なぜ、自首を選んだのか？なぜ、スヴィドリガイロフは死を克服できたのか？の疑問は、本人は気がついていないが、答えは明白だ。

ラスコーリニコフには、スヴィドリガイロフには与えられなかった「愛」と「神の存在」があったのだ。老婆殺しの際に、妹のリザヴェータを殺していなければ、罪の意識はなく、ソーニヤの話にも耳を傾けなかっただろう。そのソーニヤの愛により、この世に引き留められ、更生への道を歩む。神の采配としか思えない。

(引用始め)

いったいどうしてあの人たちはおれをこんなに愛してくれるんだろう。おれにはそんな価値はないのに！ ああ、おれが一人ぼっちで、誰もおれを愛してくれず、おれも決して誰もあいさなかったら。どんなにいいだろう！ こんなことがいっさいなかったら！

< (下)P.526 >

(引用終わり)

ソーニヤだけではなく、ドオーニヤや母の愛も大きく、「一步」を進める要因にもなる。

愛とは、本人の意思にかかわらず、こんなにも大事な生きるための指針なのだ。

同じように、殺人を犯しながらも、他人に施しをしていたスヴィドリガイロフであったが、ドオーニヤに拒否された時点で、彼の運命は決まる。

罪の意識に苛まれながら娑婆にいるより、「獄に入れられて、自由になった」ラスコーリニコフ。やっとソーニヤの愛を受け入れ、幸福を感じることができた。

本人は、まだ「愛」の力に気がついていないけれど。

だが、これから先、本当に罪を認め、大きな献身的行為で償っていくことができるのだろうか。

ラスコーリニコフの「新しいものがたり」を是非読んでみたい。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。
ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

《トランプのアメリカが乗り越える否定の壁》

エベレストの無酸素単独登頂に挑戦して、亡くなった登山家がいる。私は、彼の活動支援を募る有志による彼の講演企画への誘いを Facebook で目にした。

その登山家は『否定の壁を超えたい』とインタビューで語っていた。

彼の登山体験をライブストリームで共有することで、一体感を味わい、《感動をありがとう》というコメントとともに、シンパもアンチも無事下山でカタルシスを感じるようなイベントだったようだ。

《やってみた》企画である。見世物とさしてかわらない。個人の無謀が、自己啓発の装いでイベント化されている。芸能人がヒッチハイクで大陸横断とか、100 キロチャリティマラソンに近いノリだ。ただ、常識人は、TV の企画は、スポンサーありきで、ギャラが発生していて、リアリティ番組にはヤラセが付き物もあるというのは、薄々知っている。

他のプロ登山家から『プロ下山家』と揶揄され、実力不足を指摘されていた彼は、結局、エベレストの中腹で遭難して亡くなった。どうやら単独ではなかったらしい。

ラスコーリニコフは、六畳一間のボロアパートで何かになろうとして暗い情念を育てた。『一つの殺人は百の善行で償われる』という独善的な思想が芽吹き、毒キノコのように育ち、金貸しの老婆を斧で殺して、金を奪うという強盗殺人として結実した。ソーニヤに出会わなければ、彼は同じような殺人を何度も繰り返しただろう。目の前の一人との大切な絆より、カンパしてくれた不特定との善意の関係が重要なら、その善意を正当化するために、ずっと殺し続けたはずだ。否定の壁を超えるためには、まず独善的な思想に則って、自分を殺すことから始めなければならない。

『否定の壁を超える』ことよりも、自分自身の足元を踏み外さない常識のほうがよっぽど大切だ。自分自身でいられないから、無謀な企画をたてる。周囲が呆れて、大切な目の前の人から見放されるだろう。自己欺瞞が肥大すると、半ば自殺のように非常識に突進していくのだ。

エベレストという自然が相手だったから、まだしも、非常識に理屈をつけて、他人のモラルの混乱を弄ぶ世界が、自由主義市場経済からなる覇権国アメリカであり、それを率いるのはスヴイドリガイロフの人物トランプ大統領である。彼は、目下、2000 兆円の財政赤字という財政の壁＝否定の壁を非常識によって乗り越えようとしている。

自分をうまく騙せるものが誰より楽しく暮らせる国、アメリカ。スヴイドリガイロフもアメリカを夢みてピストル自殺した。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343